

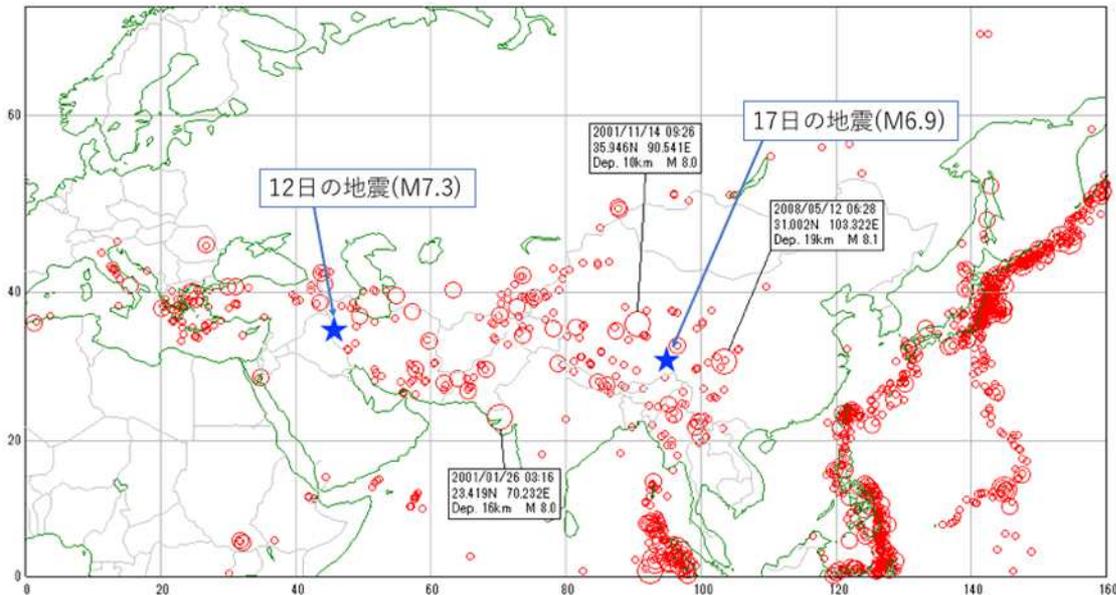


11月12日から18日にかけての世界の地震活動

先週は世界各地で顕著な被害地震が発生しました。まず、12日にはイラン・イラク国境でマグニチュード7.3（米国地質調査所調べ）が発生し、14日の時点で死者400人以上、負傷者7000人と報告されています。イランでは2003年にもバム地震と呼ばれるマグニチュード6.6の直下型地震が発生し、死者4万人以上を出したとされています。この地震により、世界遺産のアルゲ・バムはほぼ全壊してしまいました。

この地域の問題は、建物の耐震性が極めて低い事にあります。これは多くの民家が日干しレンガ（アドビ、adobeと言います。有名なpdfやフォトショップ等のソフトウェアで知られるアドビと同じスペルです）で作られていた事が原因です。中近東地域は世界有数の地震発生帯なのですが、地震の再来間隔が極めて長く、同一地域では数千年に一度という事もあり、日干しレンガ等が長い間使われてきたものと思われます。

さらに17日にはチベットでマグニチュード6.9（中国地震局発表）の地震が発生しました。こちらの地震はまだ被害全容がわからない状況です。下の図はこれら2個の地震および1980年以降のマグニチュード6以上を記録した地震の分布です。日本周辺はもちろん多くの地震が発生していますが、中国内陸部、ヒマラヤ山脈周辺（ネパールなど）、中東からトルコ、ギリシャ、イタリアにかけても多くの地震が発生している事がわかります。



韓国で発生した地震（M5.4）について

15日午後、慶尚北道でマグニチュード5.4の地震が発生しました。この地震により、16日に予定されていた「大学修学能力試験」（日本の大学入試センター試験に相当）が1週間延期された事が日本でもニュースとなりました。この地震は韓国で近代的な地震観測が開始されてから、2番目に大きな地震でした（一番大きかったのは昨年9月に同地域で発生したM5.8の地震）。

昨年の9月の地震も15日の地震も、いずれも熊本地震と同じメカニズムを持つ地震であり、



長期的にみると将来発生が確実な南海トラフの巨大地震の準備が進んでいるために韓国南部にも歪が溜まっている事を証明する地震です。この地震の震源地の近くには多くの原発もあり、この点でも危惧される地震です（下図）。



これらの地震は相互に関係があるのか？

このように短期間で地震のニュースが続きますと、よくメディアから聞かるのが「これらの地震活動は相互に関係しているのか？」、「日本には影響はあるのか？」という事です。一般の地震学の常識では、これらは十分に距離が離れており、相互には関係しないというのが公式見解となります。

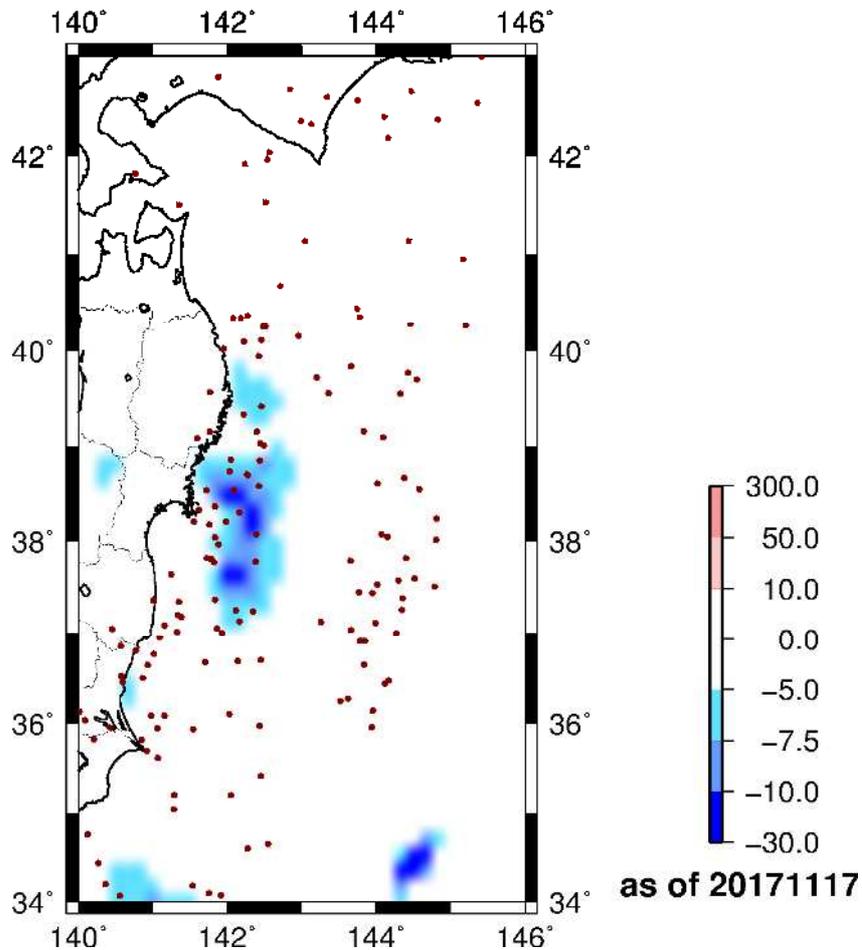
また韓国の地震は二回りほど規模が小さく、この地震は昨年9月に発生した地震に誘発された地震と考えられます。ただイラン・イラク国境の地震と、チベットの地震は最新の理論（臨界現象の理論：長距離相関の考え方）では、相互に関連している可能性があります。そしてその原因は、北上するインドプレートとユーラシアプレートとの動きが関係しています。

東北沖にターゲットを絞った地下天気図®

10月9日のニュースレターに引き続き、東北沖の状況です。10月の時点で、岩手沖・宮城沖・福島沖・茨城沖の広い範囲に地震活動静穏化異常が広がっていました。

8月：地震活動静穏化の異常が岩手沖、宮後沖を中心に大きくなる→9月：岩手沖、宮城沖で静穏化が残るが、異常が収束傾向に見えた→10月：東北沖全域に静穏化が再び大きく広がった→11月：岩手沖の異常がかなり小さくなり、宮城沖の異常が現在は残っている、という状況です。

先週11月13日のニュースレターで、北信越・関東北部について、地震発生の準備が整った可能性が高い（ニュースレター最後のページの薄い赤丸の地域）とお知らせしましたが、東北沖も発生準備が整ってきた可能性が高いと判断しています。



11月17日時点の最新の地下天気図。青い異常の領域がかなり小さくなってきた。

参考：10月6日時点の地下天気図。異常が東北沖で大きく広がっていた。

